

## 令和元年度 奈良市立左京こども園 研究実践概要

園長名 鍋谷 理佐子  
全園児数 152名

### 1. 研究主題

心豊かに生き生きと活動する幼児の育成  
—子どもが自ら遊びをはじめる環境構成と援助の工夫—

### 2. 研究年度

初年度

### 3. 研究主題設定理由

子どもたちは、明るく素直で自分の思いを言葉で表現しようとしているが、友達や様々な人に分かるように意見を伝えることや、相手の思いを聞くなどのコミュニケーション能力の乏しさがみられる。また、運動経験の不足を感じる子どもも多く見受けられる。そこで「明日も遊びたい」という意欲を持ち、友達と関わりながら、豊かな感情表現をし、主体的に生き生きと遊び活動する子どもの育成を目指すようにした。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

子どもが「明日も遊びたい」という意欲をもち自ら遊びはじめ、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい心豊かに生き生きと活動する子どもを育てる。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について共通理解を図り、全体的な計画や指導計画を再検討し、研究を進める。
- ・子どもの発達過程を捉え、子どもが興味関心をもって主体的に遊べるための環境構成や援助の在り方を探る。

#### ③活動の方法

子ども達の好奇心や探求心、ワクワクする気持ちなどを育み、自ら遊び始める姿につながるか、職員間で考えそれぞれの発達に応じた遊びの環境と保育者の援助の工夫について研究を進めた。子ども達の発達に応じた環境構成、援助をすること、子ども達の興味、関心を捉え柔軟に対応していく。

[3歳児] 「きょうりゅうのたまごだ」

2学期になり、保育者が離れたところにおいても遊ぶ様子が見られるようになってきた。ある日、地面に落ちていたビー玉を見つけて拾い、しばらくビー玉を見つめて、「肉食のたまごや！」と嬉しそうな顔で言った。保育者は、ビー玉一つからどんな遊びが始まるのかとてもワクワクし、遊びの展開を見守ることにした。まず、たまごを誰かに見つけられないようにしようと、「もっと隠してあげて、“入らないでください”って書いたらいいよ」と子どもたちの声が聞かれた。子どもたちの生き生きと話す姿をみて、明日も続きが出来たらと思い、次の日も卵を隠せるおうち探しができるように進めようと思った。

次の日、登園してきてすぐに、「肉食恐竜のたまごのおうち、探してあげよう」と自分からたまごの話 시작했다。たまごのおうちを探したいという思いから、こども園に行きたい、とわくわくした気持ちで登園してきた姿をととても嬉しく感じた。

肉食恐竜のたまごのお家探しをしている姿を見ていた他の子が「草の所に置いたら？」と提案し、保育者が「どうして？」と聞くと、「だって、産まれたときに草があったら食べるかもしれない」と答えた。とても面白い考えだなあと思って聞いていると、周りにいた友達が「いいね、いいね」と思いに共感し、それぞれ草を探しに行く姿が見られた。そして、「はいらないでね」という看板とロープをつけて「準備おっけー」という子どもたちの声が聞こえた。そのロープは木から地面に垂れ下がっていたが、保育者が用意したものではなく、子どもたちで見つけて工夫をして引っ張ったりくくったりしながら、自分たちの思いで一生懸命つけたものだった。この遊びを通して、1学期の間ずっと泣いて登園していた子どもが、自分のしたい遊びを見つけることで泣かずに登園できるようになった。色々な友達と関わりながら自分の思いを友達と共有する姿、今までの経験を活かして考え、自分から思いを伝えようとする姿、担任が用意した環境からではなく、自分たちで遊びを見つける姿が見られた。



(評価・反省)

子どもたちの世界に入り込み、一人一人の思いを大切にすることで、安心して遊べる環境となる。

保育者が仲立ちになり、周りの子どもたちと同じ思いで遊びが進められるように言葉を添えたり、子どもたちの求める環境を用意したりすることで、明日も遊びたい気持ちにつながる。活動の中にワクワクを残すことで、明日もこども園に行きたいなと思えるのではないかとということがわかった。

[4歳児] 「せんたくごっこがはじまった」

春、保育者が遊びに誘うと「うん！やろう」「やりたい!!」と夢中になって遊んでいるが、翌日にはまた「何しようかな？」の状態に再び戻り、誘い掛けなければ遊びがスタートできない姿が目立った。受け身ではなくもっと自発的に遊べるようになるにはどのような工夫が必要なのかを考えたときに、今子どもたちに提示している遊びが子どもの興味・関心とうまくリンクしていないのではないかと…という思いに辿り着き、そこで、もう一度子どもたちの姿から本当に面白い！やってみたい！と心から感じられるものは何であるのかを見直すことにした。

6月下旬、なかなか夢中になれる遊びが見つけれなかったり、楽しんで遊んではいるものの明日の遊びにはつながらなかったり、といった課題に悩まされることが続いていた。

しかし、読み聞かせをした絵本「せんたくかあちゃん」をきっかけに、洗濯ごっこをして遊ぶことになった。タライに洗濯板に洗濯ロープ、気に入った絵本の世界観のままに、主人公と同じ体験をする事で夢中になって遊びに入り込む子どもたちの姿がたくさん見られた。

この遊びを用意するきっかけの一つとなったA児の存在があった。日頃遊びになかなか入ることができないA児がどうしたら「これならやってみたい！」と思い行動に移すことができるのか…。保護者との会話の中に出てきた、“お手伝い”というキーワードだった。A児は大好きなお手伝い感覚で遊びの世界に1歩足を踏み入れることができた。



#### (評価・反省)

子ども達の興味関心を敏感にとらえ、それに寄り添った遊びの提案が遊びの継続につながる。

『本当にやってみたいと感じた遊びであれば、受け身だった子ども達も少しの刺激と少しのヒントで自分たちで遊びを始めようとするようになる。』ということを確認し、その後も意識しながら取り組みを続けた。

#### 【5歳児】 「焼いてみたい！」

進級当初、遊びがなかなか広がらなかったり、継続して遊べなかったりする姿が見られた。そこで、遊びの振り返りで、「明日はどうする？」ということテーマにクラスで話し合うようにした。話し合いの中で、「明日もやりたい」という気持ちを引き出したり、子どもが「やりたい」「試してみたい」と思ったことを見逃さず実現できるように、援助したりしてきた。

石鹸をおろし器ですり、水を加え、泡遊びを楽しみ、トロトロのクリームのような泡をつくろうと水や石鹸の量を考え、泡立てていた。ある日、保育者の「Bちゃん、泡どんな感じになった？」の問いかけにB児は「パンケーキみたい」とうれしそうに答えると、その話を聞いていた子どもが「生地やな」と言った。保育者はB児の気付きに共感し、「先生、フライパン持ってくるから焼いてみる？」と保育者の興味やワクワクを子どもに投げかけた。すると周りにいた子どもも「え!!焼くの?」「どうやってするの」「焼いてみたい!!」「先生、いつ焼くの」と焼くことを心待ちにする姿が見られた。焼く前に、焼いたらどうなるかを予想し「爆発する」「膨らむ」「プツプツする」「いい匂いがする」「広がる」など、次々に考えたことを生き生きとした表情で伝え合っていた。焼き始めると、泡クリームの変化に気付き「端っこ固まった」「泡が動いてる」など、気付いたことや考えたことを口々に言いながら、だんだんとフライパ



ンに近づき、興味深く覗きこみ、泡の変化を見守っていた。火からおろした後も冷めた泡を触ったり、時間が経っても泡の変化を気にしたりする姿が見られました。また、予想した皆の考えの答え合わせをすると、自分の考えが合っていて喜ぶ子どもや、お好み焼きやパンケーキと同じと思っていた子どもは「固まらなかったね」と残念そうな子どももいた。しかし、自分たちが考えたことを実現できて満している様子だった。

#### (評価・反省)

子どもがやりたいと思ったことや疑問に思ったことを見逃さず実現したことで、子どもたちの興味や関心がより深まった。クラス全体で遊びの様子や内容を共有しやすいよう遊びの様子を写真に撮りそれをテレビで写すなど、工夫することで共通の目的も見つけやすく、興味をもっていなかった子どもも「僕も一緒にしたい」「明日もしたい」など、翌日、登園後すぐ意欲的に遊ぶ姿につながった。また、気付いたことや考えたことを伝え合うことができ、普段の話し合いでは積極的に話さない子どもも自分の考えを言う姿につながった。

### 5. 研究の成果

子どもが自ら遊びを始め、遊びを展開するためには、子どもがやってみたいと思える環境を作ったり、子どもがやりたいと思ったことや疑問に思ったことを、すぐに試せる素材や場を用意したりすることが大切であることがわかった。また、その時の子どもの様子に応じて、すべて保育者が準備するのではなく、子どもと共に創っていくことの大切さも感じた。保育者が子どもの思いを読み取り見守ったり、揺さぶったりしながら援助をしていくことで、子どもたちの遊びたいという意欲が育ってきた。子どもの気持ちに寄り添い環境を構成していくことの大切さを再確認した。

### 6. 今後の課題

子どもの発達段階や個人差を理解し、発達に即した環境構成や援助を工夫することが大切だと感じる。試したり探究したりする機会をもち、子どもたちが夢中になって遊ぶことができるようにしていきたい。心豊かに生き生きと遊ぶ子どもを育むために、子どもの保育者間の連携を深め、引き続き取り組んでいきたい。